

臨時災害放送局における方言利用の意義に関する考察 — 福島県富岡町「おだがいさま FM」を事例として —

大 内 齋 之

Abstract

After the Great East Japan Earthquake, in Iwate, Miyagi, Fukushima, Ibaraki, thirty extraordinary disaster FM stations started broadcasting. In this paper, we focus on the Tomioka Extraordinary Disaster FM Station, “Odagaisama radio”, and consider about the meaning and the function of dialect that was used in the program.

As a result of this study, we have recognized three functions, such as the function of a sense of belonging to a hometown, the function to give relief and courage, and a preservation function of the dialects.

キーワード……東日本大震災 臨時災害 FM 福島県富岡町 方言 タブレット

1 はじめに

本稿は、臨時災害放送局（以下、臨時災害 FM）における方言利用の意義について考察を行うものである。事例とする、とみおかさいがイエフエム¹⁾（以下、おだがいさま FM）は東日本大震災による福島第一原子力発電所（以下、福島第一原発）の事故に伴い福島県富岡町が開局した臨時災害 FM である。臨時災害 FM は免許自治体地域内に演奏所を設置するが、富岡町の場合は福島第一原発事故に伴い富岡町が警戒区域²⁾に指定されたためスタジオ等演奏所は、郡山市に開局せざるを得ない状況となった。このように免許自治体の地域外で開局したのは臨時災害 FM の制度化後初めてのことである。

ところで福島原発事故に伴い、富岡町民は避難を余儀なくされ、全国 47 都道府県にそれぞれ避難するという状況となったのである（詳細は後述）。そうしたことからおだがいさま FM では、地元の富岡町の方言³⁾を使った番組を編成し、町の様子や町の昔話などを放送している。そこで本稿では、その富岡町の方言を使った点に注目するものである。

2 先行研究

本稿を位置づける先行研究は 2 つの流れがある。一つは、方言の機能についての論考である。

もう一つは、方言を利用した番組についての論考である。

一つ目の方言機能についてであるが、小林隆は「現代の方言は、思考内容の伝達という言語の基本的な機能よりも、相手が自分の仲間であることを確認・表示する機能が備わっていると考えられる」（小林 2007）と方言の機能について分析をしている。小林の分析によれば方言は、コミュニケーションをするための機能から、仲間とか地域社会に属する人間という郷土への帰属意識が高まる言語に移行してきているとしているのである。こうした方言の機能という点に本稿も注目するものの、本稿においてはラジオ番組で方言を使用し、その使用することに対する意義を考察するものである。小林は、方言の機能そのものについて論考であり、メディアが方言を使用することについての機能を論考したものではない。

もう一つの流れ、方言を利用した番組についての論考であるが、方言利用という視点に関するコミュニティ FM や臨時災害 FM の先行研究はほとんど見当たらない。

そうした中でも、アイヌ語で放送している北海道のミニ FM⁴⁾である FM ピパウシと沖縄方言でニュースを放送している県域 FM、ラジオ沖縄⁵⁾に関する論考がある。

柴田（2007）は、ラジオ沖縄が開局した 1960 年から放送している沖縄地方の方言を使用した「方言ニュース」番組について、当初この番組は共通語を理解できない高齢者層向けに始められたものの、その後は共通語の普及によって沖縄方言を話せない地元住民が増えたことで、沖縄方言が独自の沖縄文化として逆に見直されるようになったことを指摘した。そして沖縄方言が見直された経緯については、柴田（2007）は 1972 年に沖縄が本土復帰を遂げたことに関わりがあるとした上で、「本土復帰によって、沖縄の独自性が見直され始めた」と本土復帰が見直しのきっかけになったと分析している。言い換えるならば、柴田(2007)は、本土復帰によって沖縄のアイデンティティの象徴的な沖縄方言が失われてしまう可能性があるとして、「方言ニュース」は県外向けではなく県内向けに沖縄の独自文化を再確認するために見直されたものであると分析をしているのである。

一方のアイヌ語で放送している北海道のミニ FM である FM ピパウシに関する論考において上野（2004）は、アイヌ語放送はアイヌ語そのものを知らしめるものという効果よりも、アイヌ民族についての情報の共有化やアイヌ・コミュニティーの活性化を図るものであると分析している。またアイヌ語を放送するメディアについては、アイヌ民族の内部に向けたものではなく、むしろ外部に向けてアイヌ民族の存在を主張して、日本社会全体の多文化の進展を促していくという情報発信の役割を果たしていると分析を行っている。この論考では、沖縄方言ニュースとは対照的に内に対する発信ではなく、外に対するアピールであると解釈することができる。

以上のように沖縄県の「方言ニュース」は沖縄県の独自文化として沖縄県民に対してアピールするものであり、一方アイヌ語放送の論考はアイヌ民族外に向けたアピールという点を論点としている。そういう観点からみれば、本稿における論点は沖縄の「方言ニュース」と同じよ

うな内部に向けた点に着目するが、被災した人たちに対する方言を使用するという極めて特殊な状況の中に置かれた場合における、方言を使用する意義や方言の機能についての考察であり、沖縄の「方言ニュース」に関する論考とアイヌ語放送に関する論考では、方言の持つ機能の検証という論点とは異なるのである。

3 研究目的と研究方法

富岡町は福島第一原発事故に伴い警戒区域とされたため、被災者は富岡町を離れ、全国津々浦々に避難を余儀なくされた。そうした状況に鑑み本稿では、おだがいさま FM で放送している「んだっペトーク」という番組で方言が使用されていることで、被災者に富岡町を思い起こし、ふるさとの富岡町を感じてもらえるようなものとして実際に伝わるのかどうか、そうした番組内で使用する方言についての機能を検証するものである。

研究方法は放送番組内容の分析と「んだっペトーク」のパーソナリティと出演者、それに仮設住宅で暮らすリスナーへの聞き取り調査を行った。

4 調査対象地域の概要

4-1 福島県の被害状況



図 1 福島県地図

東日本大震災による福島県内の被害は、家屋の全壊が 21,252 棟、半壊が 73,570 棟、一部損壊が 160,293 棟となっている（2014 年 5 月 15 日現在、福島県災害対策本部）。死者の数は 3,527 人（死亡届出等 225 人）、このうち直接死は 1,603 人だが、関連死⁶⁾は直接死を上回る 1,699 人

である。関連死者数を地域別に見ると、福島第一原発は浜通りの双葉郡大熊町（図1参照）に位置しているが、その浜通りに関連死者数が偏っているのである。関連死が一番多い市町村は南相馬市の450人、浪江町の320人、富岡町の240人、いわき市の125人、大熊町の102人、楡葉町の100人、双葉町の99人となっている（表1参照）。いずれも浜通りに位置する市町村である。復興庁が2012年3月31日現在で調べた関連死の死因区分別⁷⁾分析結果によると、「避難所等における生活の肉体・精神的疲労によるものが約5割、避難所等への移動中の肉体・精神的疲労によるものが約2割、病院の機能停止による初期治療の遅れ等によるものが約1割となっている」。（2013年5月15日現在 復興庁発表）また復興庁では今後、今回の福島第一原発事故による被災者に対し留意すべき事項として、「慣れない避難生活の長期化、生きているうちに今の避難先から出られないかもしれないという不安や、生きがいや希望、生きている意欲も持てないというメンタル面を挙げている」（2013年5月15日現在 復興庁発表）。

表1 福島県内死者数

市町村	直接死	関連死	死亡届等	死者合計
福島市	6	9	—	15
伊達市	—	1	—	1
国見町	1	—	—	1
川俣町	—	18	—	18
大玉村	—	1	—	1
郡山市	5	6	2	13
須賀川市	9	1	1	11
田村町	—	9	—	9
鏡石町	—	2	—	2
石川町	—	1	—	1
三春町	—	1	—	1
白河市	12	—	—	12
西郷村	3	—	—	3
会津若松市	1	3	—	4
相馬市	439	25	19	483
南相馬市	525	452	111	1088
広野町	2	38	—	40
楡葉町	11	100	2	113
富岡町	18	240	6	264
川内村	—	72	—	72
大熊町	11	102	—	113
双葉町	17	99	3	119
浪江町	149	320	33	502
葛尾村	—	24	1	25
新地町	100	8	10	118
飯館村	1	42	—	43
いわき市	293	125	37	455
計	1603	1699	225	3527
行方不明者	207			

（出所）：『福島県警察本部発表 2014年5月2日現在』

4-2 富岡町の状況

富岡町は、福島県浜通り地方の中央に位置し、北は大熊町、西は川内村、南は檜葉町とそれぞれ境を接し、阿武隈山地と太平洋の間に広がる面積 68.47 ㎏、人口は 16,001 人（2010 年国勢調査時）の町である（図 1 参照）。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災による福島第一原発の事故に伴い半径 20 キロ圏内を警戒区域と設定されたため、全町民が避難生活をせざるを得ない状況となった。そして同町民が避難した場所の内訳⁸⁾は、県内へ避難した者が 10,968 人、県外へ避難した者が 4,397 人（国外 14 人含む）となっている。県外へ避難した者を都道府県別（表 2 参照）にみると、福島県に近い北関東や東京周辺が多いが、関西や九州にも避難する被災者もおり、北は北海道から南は沖縄まで 47 都道府県すべてに分散している。

表 2 都道府県別避難者数

都道府県	避難者数	世帯数	都道府県	避難者数	世帯数
北海道	73	39	京都府	13	10
青森県	23	18	大阪府	41	22
岩手県	22	13	兵庫県	12	10
宮城県	239	136	奈良県	9	4
秋田県	26	18	和歌山県	3	2
山形県	34	19	鳥取県	1	1
福島県	10,975	5540	島根県	13	8
茨城県	598	282	岡山県	15	6
栃木県	210	97	広島県	13	8
群馬県	173	116	山口県	14	4
埼玉県	574	274	徳島県	8	4
千葉県	452	227	香川県	3	3
東京都	745	400	愛媛県	12	6
神奈川県	410	213	高知県	6	2
新潟県	307	130	福岡県	18	10
富山県	8	5	佐賀県	3	1
石川県	16	9	長崎県	7	4
福井県	16	9	熊本県	8	6
山梨県	23	10	大分県	12	9
長野県	52	25	宮崎県	10	6
岐阜県	4	1	鹿児島県	15	9
静岡県	51	31	沖縄県	17	8
愛知県	58	26	国外	14	9
三重県	4	3	合計	15,372	7,798
滋賀県	12	5			

（出所）：『富岡町 HP 平成 26 年 5 月 1 日現在』

5 おだがいさま FM

5-1 富岡町の交流拠点

富岡町民が東日本大震災による福島第一原発事故に伴い町外に避難せざるを得ないことになったことから富岡町は、福島県内のみだが応急仮設住宅を郡山市内に3ヶ所、いわき市に3ヶ所、三春町に6ヶ所、大玉村に1ヶ所、合わせて13ヶ所建設した。また臨時の役場は郡山市大槻町に設けた。さらには郡山市富田町の応急仮設住宅の中に、被災者が情報交換や余暇などに利用できる被災者交流拠点「おだがいさまセンター」⁹⁾が建てられた。「おだがいさま」とは、富岡町の方言で「お互いさま」という意味である。「おだがいさま」の考え方で各自治体の垣根を越えた支援を目指した施設である。

5-2 おだがいさま FM 開局の経緯

東日本大震災においては、岩手県、宮城県、福島県、茨城県の4県で30局¹⁰⁾の臨時災害FMが開局した。そして臨時災害FMは主に行政情報を自治体の補完として被災者に提供した（大内、2014）。2014年4月1日現在においてもなお11局（表3参照）が運用を続けている。この11局のうち、けせんぬまさいがいエフエム、ラジオ石巻、FM あおぞら、りんごラジオの4局が開局から3年以上経過している。

おだがいさまFMは、震災からおよそ2ヶ月後の2011年5月25日に無線免許のいらない微弱電波のミニFM¹¹⁾からスタートした。放送の運営は避難所の運営を町から委託されていた富岡町福祉協議会が行うことになり、ミニFMの設置場所は富岡町民のために避難所として開設されていた郡山市の多目的ホール「ビッグパレットふくしま」内であった。そして「ビッグパレットふくしま」が2011年8月31日に閉鎖されるに伴い、ミニFM版のおだがいさまFMも30日に閉局になり、これを継承する形で交流拠点の「おだがいさまセンター」内に臨時災害FM版のおだがいさまFMとして開局したのである。

免許自治体の地域外での開局は前例がなく、通常に比べ認可には時間がかかったものの、2012年3月11日の震災から1年後に開局した。免許自治体の地域外で開局するのは1995年2月に臨時災害FMが制度化されて以後初めてのことである。スタジオが「おだがいさまセンター」内にあることから、愛称はセンターの名前を取って「おだがいさまFM」と命名された。

おだがいさまFMは開局から2年余り経過したが、他の局とは異なる特徴が二つある。一つは、震災から1年後の2012年3月11日に開局し、現在の臨時災害FMの中では、おおつちさいがいエフエムに次いで二番目に遅い開局であるという点だ。災害情報を経時的にみると災害発生から情報提供内容が変化するが、こうした変化を総務省がまとめている。（表4参照）この総務省の区分に従うと、臨時災害FMは「①混乱期」もしくは「②混乱収束期」に開局し、被災者に対して被害を軽減するために被害情報や緊急情報、行動指示情報などの放送を行ってき

た。しかしおだがいさま FM は、表 4 の「復興期」に開局したとみられる。そして震災から 1 年後の開局ということは、発災直後の緊急情報や被害情報などを被災者に伝える臨時災害 FM ではなく、行政情報、民間生活情報、街づくり情報、復興情報を放送するための開局であると考えることができる。

表 3 臨時災害 FM 一覧表

市町村	愛称	開局日	期間
大槌町(岩手県)	おおつちさいがいてフエム	2012年3月31日	2年
釜石市(岩手県)	かまいしさいがいてフエム	2011年4月7日	2年11ヶ月25日
陸前高田市(岩手県)	りくぜんたかださいがいてフエム	2011年12月10日	2年3ヶ月22日
気仙沼市(宮城県)	けせんぬまさいがいてフエム	2011年3月22日	3年10日
気仙沼市(本吉向け)	けせんぬまもとよしさいがいてフエム	2011年4月22日	2年11ヶ月10日
石巻市(宮城県)	ラジオ石巻	2011年3月16日	3年16日
女川町(宮城県)	おながわさいがいてFM	2011年4月21日	2年11ヶ月11日
名取市(宮城県)	なとらじ801	2011年4月7日	2年11ヶ月25日
亘理町(宮城県)	FMあおぞら	2011年3月24日	3年8日
山元町(宮城県)	りんごラジオ	2011年3月21日	3年11日
富岡町(福島県)	おだがいさまFM	2012年3月11日	2年21日
南相馬市(福島県)	南相馬ひばりFM	2011年4月15日	2年11ヶ月16日

(出所)：『総務省資料から筆者作成 2014 年 4 月 1 日現在』

表 4 時間経過による災害情報の変化

1、平常時・警戒期 防災情報、気象情報、河川情報、火山情報、緊急地震速報、津波情報（大津波・津波警報、注意報）避難情報（指示、勧告、準備情報）
2、発災期 地震情報、緊急地震速報、津波情報（大津波・津波警報、注意報 ※余震時）避難情報（指示、勧告、準備情報）、気象情報（警報、注意報）
①混乱期（自助・共助：発災から 72 時間） 行動指示情報、被害情報、安否情報・避難先情報、救出情報、救援情報、ライフライン情報
②混乱収束期（公助の本格化） 被害情報、安否情報・避難先情報、救出情報、救援情報、避難所情報、支援情報、ライフライン情報
③復旧期（生活の確保・維持） 支援情報、ライフライン情報、行政情報、民間生活情報
④復興期 行政情報、民間生活情報、街づくり情報、復興情報

(出所)：『総務省』

おだがいさま FM の二つ目の特徴は、開局した場所が免許自治体の富岡町内ではなく、町民が避難している福島県郡山市内の仮設住宅内であるという点である。同町が警戒区域に設定されたために町内に開局できず、免許自治体地域以外の場所に開局せざるを得ない状況となった。こうした事例は他に例がなく、臨時災害 FM の制度後初めてのケースである。

本来臨時災害 FM の目的は、地方自治体が住民向けに情報を提供することであり、放送法第 8 条に規定する「臨時かつ一時の目的（総務省令で定めるものに限る。）のための放送」のうち、放送法施行規則第 7 条第 2 項第 2 号に規定する「暴風、豪雨、洪水、地震、大規模な火事その他による災害が発生した場合に、その被害を軽減するために役立つこと」であると定められてきた。おだがいさま FM の開局した時期は、これまでの臨時災害 FM の開局の時期とは異なっているのである。

5-3 タブレット端末の導入

富岡町では震災のため一時休止していた広報誌を 2011 年 4 月に復活させた。がしかし、時間の経過とともに被災者からは月 2 回の広報誌よりもっとタイムリーな情報提供を求める声上がるようになった。さらに、富岡町民が全国津々浦々に避難しているという現状がある。福島県内の仮設住宅であれば、広報紙の配布は容易であるが、全国に分散避難している町民に対する情報提供という現状では広報紙の配布には無理がある。また放送電波の到達範囲には限界があるため郡山市外では、おだがいさま FM を聴くことができない。富岡町としては、町からの情報提供手段のおだがいさま FM を通じて、全国どこにでもいる町民が聴ける体制をつくるのが急務だった。

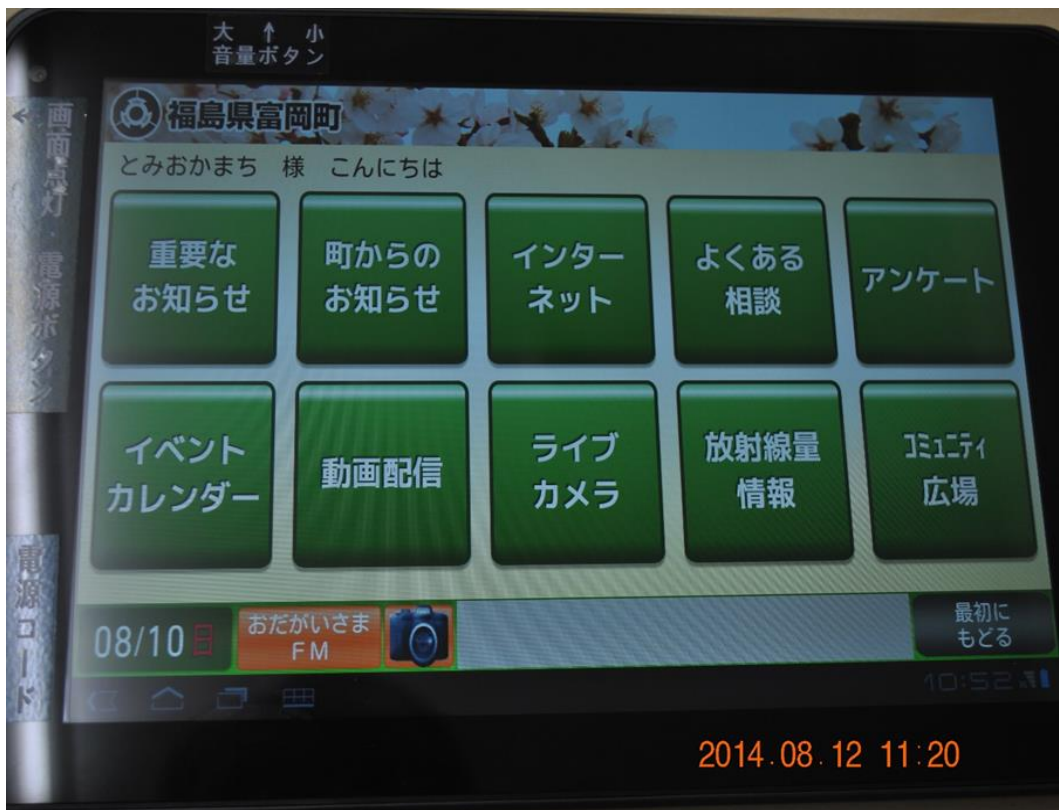
富岡町は、まず広報紙ではなく浪江町で先行実施していたフォトフレームに行政情報を乗せる方式を検討した。通常フォトフレームに行政情報を乗せるには、電話回線を使用して画面に写真を送信するものだが、浪江町では画面に写真ではなく広報紙のような掲示板を乗せる方式を採用していた。これであれば全国どこでも見ることができるのである。ところがこのフォトフレーム方式を調べてみると修理や維持管理等が大変であることがわかった。富岡町では、原発事故からの復興計画を勘案すると短期間では終わらず長期にわたると考えていたため、手間がかかるものは、作業上無理と判断した。結局、修理や維持管理が容易で、取り扱いが簡単なタブレットの導入を決めた¹²⁾。

このタブレットは、フォトフレームと同様に電話回線を使用するもので、携帯電話が使用可能な場所であればどこでも使うことができ、高齢者向けに文字も大きくなっている。タブレット端末機器メーカーからの寄付で台数を揃え、ソフト開発などの経費は総務省「ICT 地域のきずな再生・強化事業」の補助で実現した。配布は 1 世帯あたり一台とし、約 3700 台（2014 年 7 月現在）が配布されている。このタブレットの初期画面では、10 個¹³⁾のメニューが備えられている（図 2 参照）。例えば、町への質問等を整理した FAQ 集「よくある相談」、町の行事やイベ

ントの予定を一覧できる「イベントカレンダー」、タッチパネルで回答できる「アンケート」、町民同士の交流サイト「コミュニティ広場」、町の25ヶ所の様子をリアルタイムで見ることができる「ライブカメラ」、各地の放射線量が分かる「放射線量情報」、議会の様子を見ることができる「動画配信」といったメニューがある。さらにこの10メニューの他に画面下部におだがいさまFMのボタンがあり、電話回線で全国どこからでもリアルタイムにおだがいさまFMを聴くことができる機能が備わっている。行政情報とおだがいさまFM聴取という一石二鳥の役割をタブレットは果たしてくれるのである。

こうした機能を備えたタブレットは実際どの程度の住民が利用しているのだろうか。2014年7月の利用実績によれば、一番ヒット数が多いのは「町からのお知らせ」が9400件あまりで、一日平均300件を超えている。次いで「ライブカメラ」が9100件あまり、一日平均ではおよそ293件、おだがいさまFMは3番目で7500件あまり、一日平均およそ241件となっている。(表5参照)

図2 富岡町のタブレットの初期画面



(著者撮影)

表 5 タブレット利用状況

メニュー	ヒット総数	一日平均ヒット数
重要なお知らせ	1,923	62
町からのお知らせ	9,459	305
よくある質問	862	27.8
アンケート	649	20.9
イベントカレンダー	971	31.3
動画配信	3,180	102.5
ライブカメラ	9,106	293.7
放射線量情報	1,117	36
コミュニティ広場	813	26.2
おだがいさまFM	7,501	241.9
※ヒット数は、ページにアクセスのあった件数		
※同じ人が何回もアクセスすればその分加算される		

（出所）：『富岡町』

5-4 おだがいさま FM の番組の特徴

前述したようにおだがいさま FM は震災から 1 年後に開局したことで、被害を軽減するための被害情報や緊急情報、行動指示情報などを放送するのではなく、復旧・復興を目的とした開局だった。では具体的にどんな内容の放送をしているのか。富岡町の社会福祉協議会の職員で、おだがいさま FM の運営をミニ FM の頃から担当しパーソナリティも兼務している吉田は、放送の狙いについて次のように話している。

町民が主役になれる番組。せっかく富岡町にある富岡町のラジオ局なのでそれを大いに利用して富岡町に住んでいた人たちは主役になれるような番組作りを作っていきたいなあと思っています¹⁴⁾。

震災前の富岡町には、新聞社やテレビ局、ラジオ局などの町としての地域メディアはなく、町から町民への情報提供手段は広報誌のみだった。こうした状況の中でおだがいさま FM が開局したことで、行政情報はラジオ放送を通じて広報できるようになった。

仮設住宅での生活が引き起こす問題として、これまでお付き合いをしたことのない人が隣の人であったりすることがあり、近所付き合いがうまくいかず、しがって普段の日常会話が少なくなり、そうしたことが震災のストレスと重なり、中には引きこもり状態になる人もいるという¹⁵⁾。当然のことながら、こうした非日常の避難生活が長くなると、ストレスになる。そうした現状から吉田恵子はラジオで放送する内容を次のように話している。

富岡町に住んでいたら黙って入ってきた情報、例えば誰々さんの息子とどここの娘さんが結婚したんだってという情報だったりとか、どここの誰々さんが救急で運ばれたんだってとか、そういう話が聞きたいんだということがなんとなくわかってきたんです。でも私たちはそれを話すことができません。でも誰かが来て話すことは何ら問題はないので、いろんな人をスタジオに招いている人から自分の情報を発信してもらおう、という取り組み方もしています¹⁶⁾。

吉田が指摘する情報は、いわゆる近所同士の井戸端会議のようなもので、他愛ないような日常会話である。避難を余儀なくされ、仮設住宅で暮らすことになったことで、それまでお付き合いしてきた近隣住民と離れ離れになり、震災前の当たり前の日常生活が奪われているのが被災者の現実である。吉田が指摘する情報とは町からの行政情報というものばかりではなく、日常の近所同士の井戸端会議のような他愛ない日常会話に出てくるような内容を意味するのである。そうしたことから吉田は、仮設住宅や避難している現状から少しでもおだがいさま FM が被災者の役に立てるようにと、番組を放送する上で注意していることとして3点をあげている。

自宅ではないところで生活して、心身ともに弱って亡くなる人が多くなっているんです。だからそういう人たちにどういった希望を与えるか、どういう放送をすればそういう人たちが元気になるのか、そういうことを考えながら放送しているつもりなんですけど。まずは富岡町を思い出せる。忘れさせないために話をする。それが一つですね。風景や場所だったり。あとは人を思い出せる放送。わざと人の名前を出す。誰かといっしょにどこかいったならば、他のどんな人と行ったのか、すると誰々で行ったと人の名前を出してもらおう。すると元気で生活しているんだなっと思えるわけです。懐かしいし、元気でやっているんだということがわかる。あとは言葉。富岡のことばを残していく。それと(町民がいま住んでいるのは)大阪とか福岡とかバラバラなので、言葉が違くと孤立しているというふうにする人が多い。自分で言葉がちがうと思うだけで。これは後から聞いた話ですが、(このラジオ局から)富岡の言葉流れてくるので、安心する、ほっとする¹⁷⁾。(カッコ内は著者が追記)

吉田が番組についてあげた3点は、一つは富岡町の風景や場所を思い出させること。できるだけ具体的な行政区域の名前であるとか、商店街の名前であるとか、通りの名前であるとか、できるだけ具体的に町の様子を話す。町の様子を話すということは、懐かしさやまた元の生活に戻れるという気持ちを持ってもらうということにもつながる。そうした気持ちを少しでも持ってもらうことで、いまの仮設住宅や避難先での暮らしで感じる孤独感や孤立感を解消しても

らい、これからの生活に希望を持てるようにしてもらって、元気を取り戻してもらえるようにすること。二つ目は人の名前を出すこと。これは仲間や友人の名前を出すことで、その人たちの安否確認にもなる。全国津々浦々に避難している現状から誰がどこで生活をしているのか、いまだにわからない状況にあるため、名前をあえて出すことで、その人の安否を確認することができるのである。そして三つ目は地元の言葉を使ってもらう。ラジオ出演ということで、緊張したりして地元の言葉ではない言葉を使いがちになるが、そこをあえて富岡町の言葉を使ってもらい、富岡町から遠く離れて避難している人たちに富岡町を思い出してもらえるように心掛けていくという。

表 6 おだがいさま FM ラジオ局 番組表

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
8:00	おだがいさまモーニング(8:00~9:00)					生放送なし	生放送なし
9:00	生放送なし						
10:00							
11:00							
12:00	昼だよ！おだがいさま！（12:00~12:20）					富岡、わが町 とみおか76.9(12:00~13:00)	
13:00	生放送なし					生放送なし	
14:00							
15:00							
16:00	おだがいさまラジオランド・第3水曜日 『んだっペトーク』(17:30~19:30)					生放送なし	
17:00							
18:00							
19:00							
20:00							

(出所)：『おだがいさま FMHP』

6 方言利用番組「んだっペトーク」

前述のおだがいさま FM の特徴のうち、3 番目の使用する言語に関連するのが方言である。中でも特徴的なのが、番組の中で方言を全面的に利用しているのが「んだっペトーク」だ。この番組は、2013 年 8 月から始まった。放送は午後 5 時 30 分から午後 7 時 30 分までの 2 時間で、毎週水曜日「おだがいさまラジオランド」のスペシャル版として、月に 1 回第三水曜日に放送されている。

この「んだっペトーク」に台本はなく、番組内容も決まっているわけではない。その日の天気やイベント案内、町の様子、町の行事や町からの情報など、音楽を入れながら自然な話の流れで進めていく番組である。一番の特徴は共通語ではなく、富岡町の人しかわからないような方言が使われていることである。日常会話のようなそれまで隣近所の人たちと話をしてきたような語り口調で進められる番組である。

この番組のキャスターを務めるのはおだがいさま FM のパーソナリティ吉田恵子と佐藤勝夫の二人である。佐藤勝夫は生まれも育ちも富岡町で、元体育協会に勤務していたが、震災後各仮設住宅群で開いていた体操教室でおもしろおかしく富岡町の方言を使いこなしていることか

ら吉田に誘われ、この番組に出演することになった。誘われるきっかけとなった体操教室は、運動不足を解消するために開かれているもので、佐藤が担当する前は福島県外からのボランティアグループが講師になっていた、しかし講師中に富岡町の方言を話す人は誰もいなく、対象者のほとんどが高齢者であったために言葉になじめない、堅苦しいなどといった「クレームが相次いだ」¹⁸⁾という。そこで富岡町の体育協会で、震災前から体操教室などで方言を話して人を引き付けると評判だった佐藤勝夫に講師役の声が役場からかかった。そして週に一回のペースで、富岡町の仮設住宅がある大玉村やいわき市平下高久、郡山市富田の各仮設住宅の集会場で体操教室を始めた。佐藤が初めて仮設住宅で体操教室を開いた時の感想である。

体操は好きじゃないけど、あなたの話はおもしろい、ひさしぶりに富岡弁を、郷土の話を聞いて涙ウルウルされた。これはみんなさみしいんだなあって思った¹⁹⁾。

佐藤の体操教室は、体操に加え合間には富岡町のいまの様子や行政情報のことなどを話しながら、教室を進めていく。「んだっぺ」「んだなあ」「そうだべえ」と方言が飛び交い、笑いがあふれる。教室に通う人たちにとっては、体操よりもそうした佐藤の方言や巧みな言葉使いを聞くことを楽しみにしている人が多い。渡辺も「(佐藤) 勝夫さんの話はみんなを引き付けるんです。みんなはそれを聞きたくてくるんです。みんな元気をもらっています」(カッコ内筆者追記)と指摘する²⁰⁾。富岡町の言葉で飾り気なく語り掛ける口調は、人を和ませる。「(体操教室の参加者は) 増えることはあっても減ることはありません」(カッコ内筆者追記)²¹⁾と佐藤の体操教室は、どこの会場でも人気になっている。

こうした飾り気ないしゃべり、しかも富岡町の方言で放送しようと企画されたのが「んだっぺトーク」であった。

2014 年 8 月 13 日に放送された番組では、吉田と佐藤がこんなやりとりをしている。

吉田：夏休みの思い出、行事とか、思い出すことありますか

佐藤：オレ？いやあ、大きな思い出ひとつあんだあ

吉田：佐渡に行った話？それ 3 回ぐらい聞いた

佐藤：言ったもんな、んだなあ。あの海で泳いで毛萱（けがや、地区名）の海岸からろうそく屋の手前まで流されたあというのも聞いたっぺ²²⁾。

また 2014 年 7 月 16 日の番組では、富岡町出身の大学生がゲストとして招かれていた。その大学生は、その日は仮設住宅で室内清掃のボランティアを行ったという話から佐藤がこんな話をした。

ボランティアというのは奥が深くて、してやるというのは間違いで、ボランティアをさせていただいて、換気扇の掃除をさせていただいた。というと全然疲れないんですよ。生意気言っただけなんです、おらぁ、その気持ち昔からつうとあったんだなぁ。いまもほらあまなんだけど、仕事してもねえ、してやるとか、やっつてやるとかはだめなんだなぁ。こういう仮設住宅にのけさそこへえって、あっちあっちと思いながら、換気扇を掃除させてもらって、自分を磨くんですね。心をみがくんですね²³⁾。

このように番組内で富岡町の方言を話すことで、富岡町民が震災前の日常を方言の中から感じると同時に、全国に散り散りになった町民の気持ちを方言で精神的につなげていくのである。つまり方言を聞くことで、郷土への帰属意識を高め、仲間とか地域社会に属するという意識を持ってもらおうというものである。そして吉田は富岡町の言葉を使うことの意味をこのように話している。

むかし、上野駅に行って東北訛りを聞いて帰ったというのとおなじですね。いま富岡町にはだれも住んでないですよ。家族はバラバラなんです。世代もバラバラなんです。子どもたちは避難先の学校に通っているんです。大阪とか東京とか。そうするとそこに住んでいる言葉がふるさと言葉になりますよね。富岡の戸籍を持っていても、住民票があっても富岡の言葉ではない言葉話す子供が増えていくわけですよ。たとえ、町に全員が帰ってきても、富岡の言葉を話す人がいなくなってしまう。だから残しておかなければいけないだろうと思います²⁴⁾。

こうした番組はリスナーにはどのように届いているのか。震災前富岡町に住んでおり、震災後はいわき市平下高久の仮設住宅で暮らす渡辺恵子は、次のように話している。

やはり吉田恵子さんとか、富岡の方ですから。体協の佐藤さんもよく知っているので、わあ懐かしいって。なんか元気が出るというか、聞いていると笑いたくなるような、悲しんでいても、そんな元気づけられるというか。泣きながら聞いていた時もありましたよ²⁵⁾。

渡辺は震災後に、家族で川内村に一時避難し、その後4ヶ所転居してようやく現在の仮設住宅に入居した。避難先は親戚や親類を頼って避難していたため、富岡町の様子はまったくわからないままだった。そして昼間は家族それぞれが仕事や学校などに出かけてしまうため、渡辺は家の中で一人になり、寂しい思いをしていた。富岡町で生活をしていれば近所付き合いや他愛のない話相手がいたが、避難先ではそうした震災前の日常生活は存在しなかった。そんな時にタブレットの配布を受けて、おだがいさまFMを聞いていたという。震災前にはラジオを聞

いたことがなかった渡辺だが、いまでは毎日欠かさずおだがいさま FM を聞いている。渡辺にとっておだがいさま FM は情報源というものよりも、吉田や佐藤の声や富岡町の方言が避難生活を忘れさせてくれる、元気づけてくれるものなのである。

このように論考を重ねてみると「んだっペトーク」という方言利用番組の機能には、3 点に集約できる。一つ目は方言を使用することで、郷土への帰属意識という機能、2 点目は方言が避難生活を忘れさせてくれるような勇気を与える機能、3 つ目は富岡町の方言を残すという機能である。

7 結論

放送法施行規則第 7 条第 2 項第 2 号で規定されているように、臨時災害 FM の本来の目的は、被害情報や生活情報など被害を少しでも軽減するためである。しかし東日本大震災の発生からすでに 3 年が経過し、臨時災害 FM は制度化された当時の目的とはちがった状況にあると言わざるを得ないのが現状である。特に富岡町の町民は、福島第一原発事故に伴い全国津々浦々に避難しており、いつ元の生活に戻れるのかという見通しはたっていない状況にある。そうした現状の中でおだがいさま FM の運営者は、どんな番組をリスナーに供給することが求められているのか。試行錯誤の中で番組を企画し放送を続けているのである。そこであらためて現状における臨時災害 FM の役割とはなにかを本稿は探ってきた。その中で注目したのが「んだっペトーク」という方言を利用した番組であった。

この「んだっペトーク」でツールとして利用されている方言の機能について、小林は「現代方言は、思考内容の伝達という言語の基本的な機能よりも、相手が自分の仲間であることを確認・表示する機能が備わっている」（小林 2007）と分析をしている。さらに東北大学方言研究センターでは、方言の存在について次のような指摘をしている。

言葉は人間と共にある、地域の言葉である方言は、地域の人々と共にある。社会の効率化、文化の画一化の流れの中で、人々は方言にその土地らしさを求めるようになってきている。都会化の波が各地に及ぶ中で、ふるさとの温かみを方言に感じ取ろうとし始めている。方言は今や人々の地域的アイデンティティの拠り所と言えるものなのである。これまで、当たり前の言葉であった方言が、現代においては、人間の生存を心理的に支える存在にまでなってきたのである。（東北大学方言研究センター、2012.p3）

本稿における「んだっペトーク」番組で使用される方言機能を検証した結果、ラジオ番組において方言を利用する意義や機能についてという問いに対して 3 つの機能が確認できた。一つ目は、小林が明らかにしているように方言を使用することで、相手が自分の仲間であることを確認・表示するという郷土への帰属意識という機能、つまり方言という言語はその地域だけで

しか話さないということが特徴であるため、方言を話すことができるということで仲間に対する表示になるのである。2 点目は、方言が避難生活を忘れさせてくれる安心や勇気を与える機能である。この安心、勇気を方言が与えるという機能は、方言のイントネーションや音韻を聞くことで精神的に日常を自分の中に取り戻すことができるというものである。つまり現在富岡町民は、避難生活を余儀なくされ震災前の生活とはちがった生活を起こっているのである。そこで方言のイントネーションや音韻を聞くことで、精神的に安らぎを覚えると分析できる。3 つ目は富岡町で生まれ育った子供たちをはじめ、富岡町で育った人たちに対する富岡町の独自文化の継承機能である。ラジオ沖縄における「方言ニュース」の先行研究において、沖縄が本土復帰を遂げたことから逆に沖縄方言を話すことができない地元住民が増えたことが柴田（2007）の先行研究で明らかになった。富岡町の方言においても震災前に当たり前に話されていた富岡町の方言が、福島第一原発事故で全国に避難せざるを得ない状況となり、富岡町の方言を話す機会がなくなり、方言が失われてしまう可能性があるとして分析できる。そうしたことから方言を話す機会、聞く機会を作り、こうした番組を通して子供たちや富岡町を離れざるを得ない人たちに対して、富岡町の方言を継承していくという機能である。

<注>

- 1) おだがいさま FM の開局は、震災から 1 年後の 2012 年 3 月 11 日である。
- 2) 東京電力福島第 1 原発事故で全域が警戒区域に指定され、全町民が避難している富岡町は 3 月 25 日午前 0 時、帰還困難、居住制限、避難指示解除準備の 3 区域に再編された。
- 3) 福島県の方言は、語中・語尾でのカ行・タ行子音の有声化とガ行子音の鼻濁音化、シ・シュ、チ・チュとツ、ジ・ジュとズの違いのないこと、ペーパー言葉などがよく知られている。（平山輝男、1983）
- 4) 1960 年 7 月 1 日開局。略称：ROK 周波数：864KHz 出力：10KW 本社：沖縄県那覇市。
- 5) 2001 年 4 月開局、電波法第 4 条第 1 項に規定する「発射する電波が著しく微弱な無線局」によるもので、免許のいないラジオ。放送は月に一回午前中の 1 時間のみ。
- 6) 復興庁の定義によると「東日本大震災による負傷の悪化などにより死亡し、災害弔慰金の支給等に関する法律に基づき、当該災害弔慰金の支給対象となった者」とされ、県または市町村が審査を経て災害関連死を認定、これに基づき東日本大震災での震災関連死者数が公表されている。
- 7) 復興庁公表「福島県における震災関連死防止のための検討会」資料。調査時点は 2012 年 3 月 31 日。
- 8) 避難先市町村への届出数。届出数は 90% 余（富岡町）。
- 9) 敷地面積は 100 坪あり、建物内には富岡町社会福祉協議会の事務所、調理実習室と広いスペースが設けられている。交流スペースには、外部団体からの各種イベントだけではなく、町民が主体的に取り組む趣味のサークル活動も行われている。また高齢者や障害者から相談窓口も設けられている。
- 10) 岩手県：かまいしさいがいエフエム、りくぜんたかたさいがいエフエム、おおつちさいがいエフエム、はなまきさいがいエフエム、おうしゅうさいがいエフエム、みやこさいがいエフエム、みやこたろうさいがいエフエム、おおふなとさいがいエフエム
宮城県：いしのみきさいがいエフエム、やまもとさいがいエフエム、けせんぬまさいがいエフエム、けせんぬまもとよしさいがいエフエム、わたりさいがいエフエム、なとりさいがいエフエム、おながわさいがいエフエム、おおさきさいがいエフエム、とめさいがいエフエム、しおがまささいがいエフエム、い

わぬまさいがいエフエム、みなみさんりくさいがいエフエム

福島県：とみおかさいがいエフエム、みなみそうまさいがいエフエム、ふくしまさいがいエフエム、いわきさいがいエフエム、そうまさいがいエフエム、すかがわさいがいエフエム

茨城県：たかはぎさいがいエフエム、かしまさいがいエフエム、つくばさいがいエフエム、とりでさいがいエフエム

- 11) 電波法第 4 条第 1 項に規定する「発射する電波が著しく微弱な無線局」によるもので、免許のいらないラジオ
- 12) 富岡町・植杉昭弘企画課長補佐兼聴広報課係長に対する聞き取り調査（日時：2014 年 8 月 12 日午前 10 時から、場所：富岡町仮役場（郡山市大槻町））。なお、他にタブレットを使っている自治体は、楡葉町、大熊町、飯館村。またフォトフレームを使用している自治体はいわき市、南相馬市、双葉町、浪江町（現在、タブレット開発中）、葛尾村となっている。（2014 年 8 月 19 日現在、富岡町企画課調べ）
- 13) タブレット画面には、以下のような 10 画面が出てくる。①重要なお知らせ②イベントカレンダー③町からのお知らせ④動画配信⑤インターネット⑥ライブカメラ⑦よくある相談⑧放射線量情報⑨アンケート⑩コミュニティ広場
- 14) おだがいさま FM・吉田恵子、「東日本から問いかける コミュニティの再生とラジオの役割」シンポジウムでの発言から。（日時：2013 年 10 月 27 日午後 1 時から、場所：東京国際フォーラム、主催：災害とコミュニティラジオ研究会）
- 15) おだがさま FM・吉田恵子聞き取り調査（日時：2014 年 5 月 3 日午後 2 時から、場所：福島県郡山市富田町 富岡生活支援センター おだがいさま FM）
- 16) おだがさま FM・吉田恵子（シンポジウムから）
- 17) おだがさま FM・吉田恵子聞き取り調査
- 18) NPO 富岡町さくらスポーツクラブ 理事 佐藤勝夫聞き取り調査（日時：2014 年 7 月 19 日午前 9 時、場所：福島県安達郡大玉村 富岡町仮設住宅内集会場）
- 19) 佐藤勝夫聞き取り調査
- 20) 渡辺恵子聞き取り調査（日時：2014 年 7 月 23 日午後 2 時から、場所：福島県いわき市平下高久 富岡町仮設住宅内集会場）
- 21) 佐藤勝夫聞き取り調査
- 22) 「んだっペトーク」録音（放送日時：2014 年 7 月 16 日放送午後 5 時 30 分から午後 7 時 30 分）
- 23) 「んだっペトーク」録音（放送日時：2014 年 8 月 20 日放送午後 5 時 30 分から午後 7 時 30 分）
- 24) 吉田恵子聞き取り調査
- 25) 渡辺恵子聞き取り調査

<引用文献>

- 上野昌之（2004）「アイヌ語の復興と普及におけるメディア利用の取り組みについて」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 11 号（2）、pp.23-34
- 大内齋之（2014）『<地域 FM>における災害報道の機能の考察』新潟大学大学院現代社会文化研究科提出修士論文
- 金山智子編（2007）『コミュニティ・メディア』慶應大学出版会
- 小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編（2006）『方言の現在』明治書院
- 小林隆編（2007）『方言の機能』岩波書店
- 柴田真希（2007）『ラジオ沖縄「方言ニュース」から見る沖縄方言』方言文法研究会
- 田村紀雄・白水繁彦（2007）『現代地域メディア論』日本評論社
- 東京大学新聞研究所編（1986）『災害と情報』東京大学出版会

臨時災害放送局における方言利用の意義に関する考察（大内齋之）

東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う』ひつじ書房

日本方言研究会編（2002）『21世紀の方言学』図書刊行会

平山輝男編（1983）『全国方言辞典』角川書店

橋元良明編（2005）『メディア 講座社会言語科学』ひつじ書房

松浦さと子・小山帥人編（2008）『非営利放送とは何か』ミネルヴァ書房

<参考サイト>

総務省: <http://www.soumu.go.jp/>

2014年9月24日閲覧

国土交通省: <https://www.mlit.go.jp/>

2014年9月24日閲覧

富岡町: <http://www.tomioka-town.jp/>

2014年9月24日閲覧

おだがいさま FM: http://www.gurutto-koriyama.com/detail/index_213.html

2014年9月24日閲覧

主指導教員（中村隆志教授）、副指導教員（原田健一教授・松井克浩教授）